



「 飛 瀑 ( 滝 ) 」

鶴岡地区医療学術懇話会抄録

期 日：平成 24 年 11 月 7 日 (水)  
場 所：ベルナール鶴岡

## 『 心血管イベント予防を見据えた高血圧治療を考える 』

新潟大学大学院医歯薬総合研究科

循環器学分野 助教 広野 暁 先生

高齢化に伴い、本邦における心不全患者数は今後も増加の一途を辿ることが予想される。心不全の原因疾患として高血圧症は極めて重要であるが、これらの患者群では左室リモデリングを介して高率に心房細動を合併し心原性脳塞栓の発症リスクも大きくなることから、心血管イベントの予防のためには十分な血圧管理が望まれる。

レニン・アンジオテンシン系は動脈硬化の進展から左室リモデリングに至る過程において中心的な役割を演じる。アンジオテンシン受容体拮抗薬はこれら一連の過程に作用することで“心血管系の若返り”とも言える逆リモデリングをもたらすことが知られているが、最近の研究により心房のリモデリング抑制効果も示さ

れ、心房細動のアップストリーム治療薬としても期待される。

診察室血圧を指標とした従来の評価方法のみでは、予後の良い白衣高血圧を過大評価する一方で仮面高血圧や持続性高血圧を見逃してしまう危険がある。家庭用血圧計の普及も手伝って家庭血圧測定的重要性が改めて見直されているが、患者自身が積極的に治療に参画するきっかけとしても重要な意味を持つ。

本講演では、単にガイドラインの降圧目標値達成のみにとらわれない、左室リモデリング抑制と血圧日内変動を意識した“攻めの”高血圧治療を提案したい。日常診療の参考としていただければ幸いである。

期 日：平成 24 年 11 月 25 日(日)  
場 所：荘内病院 講堂

## 第 31 回 荘内医師集談会

鶴岡地区医師会  
集談会幹事 中村 秀幸

平成 24 年 11 月 25 日(日)に第 31 回を数える荘内医師集談会が荘内病院 3 階講堂にて開催されました。出席数は酒田地区が 13 名、鶴岡地区医師会からは 31 名の参加でした。

会は午後 1 時に鶴岡地区医師会会長の三原一郎先生の開会のあいさつで開始されました。30 回を超えた集談会の意義を踏まえて、鶴岡と酒田の両地域の連携を深めるための貴重な機会と考えたいとの意見をいただき同感の意を強くしました。

各演題は、いつもの集談会らしく各科にわたり「日常診療のヒント」がたくさん学べました。総合診療が叫ばれて久しいですが、まさにはじめに「訴え」を聞く「かかりつけ医」としてのよい研鑽の会となっております。よく耳鼻科や皮膚科、眼科などの内科系以外の先生から「よくわからないから」と敬遠されているようですが内科、総合医をめざす私としては毎回とても勉強になる会です。

来年度も鶴岡の開催ですが、ちょうど定例の 11 月 24 日(日)が荘内病院開院 100 周年記念とのこととで式典が予定されているとのこと。それでその前の週の 11 月 17 日(日)に開催の予定と考えております。演題の募集や内容も再検討も必要かと考えておりますが是非とも一人でも多くの参加を期待しております。コメントを含めて紹介いたします。座長の労をおとりいただいた今立明宏先生、阿部寛政先生、石橋学先生、古屋紀彦先生に感謝申し上げます。

### (1) 「下肢痛と歩行障害を呈し診断に苦慮した 3 歳女児例」

荘内病院小児科の藤井小弥太先生よりの発表です。急性前骨髄性白血病だったのですが主訴



は歩行障害です。MRIの骨盤付近腸腰筋の異常信号、経過中に反対側への波及など興味ある経過でした。座長の今立先生からの初診時の血清LDHの高値の指摘も鋭いものでした。私も18年の開業歴で4人の急性白血病を経験し紹介していますが、どこかに可能性を考えておくべき疾患ですね。

### (2) 「当院で経験したヒトメタニューモウイルス感染症の臨床像について」

荘内病院小児科の楡井淳先生より。3歳程度の発症で下気道感染が多く季節は3—7月だそうです。小児呼吸器感染症でRSVに次いで多いとのこと。今後臨床像が明らかになっていくとのことでした。

### (3) 「心拡大と鑑別を要した前縦隔腫瘍の一例」

日本海総合病院小児科の田辺さおり先生より。この胸部写真はとても印象の深いもので、胸部写真で中心陰影の拡大を認める場合は肺門部からの血管陰影特に肺動脈陰影をよく観察することで見かけの心拡大と縦隔腫瘍との鑑別が可能であるとのこと。ネルソンの小児科学書を提示され、「helium overlay sign」を教えてくださいました。

(4) 「当院における胸腔鏡下肺切除術前の肺血管 3 DCT」

荘内病院呼吸器外科の正岡俊明先生より。当院の外来にも正岡先生より手術していただいた 4 人の患者さんがおります。何度も先生のプレゼンは拝聴しておりますが高度な手技でより侵襲の少ない術式で安全性もありますし、何とか早期の治療可能な時期の肺がん症例の発見に努めたいと思わされます。

(5) 「下肢静脈瘤手術の工夫」～術当日に歩けるストリッピング術～

日本海総合病院、心臓血管外科の山下淳先生から。これも目からうろこの素晴らしい術式ですね。庄内地域で行われている多くの手術や術式などこれからも新しい術式が考案されて実用化されていくのでしょう。

他科の情報はなかなか入手できないのですがこの集談会の場で「広報宣伝」することは庄内地域のアップデートされた医療情報を入手するよい機会です。

(6) 「地域の看護介護スタッフに向けた学習会の取り組み報告」

鶴岡協立病院内科の高橋美香子先生より。これは高橋先生のライフワーク的な活動で、地域の実践力を前進させるには多くのスタッフに繰り返し継続した学習が必要との信念で実践されています。さらに今年から「みとり」をテーマに福祉系の施設や介護職を対象にした学習会をスタートさせております。今後庄内地域でも施設での看取りが多くなることは確実です。今後の活動に注目です。



(7) 「鶴岡・三川地域における地域緩和ケアサポートチームの必要性」—地区医師会会員アンケート調査から—

鶴岡協立病院内科の高橋牧郎先生より。利用は 19.7%にとどまり理由は依頼する患者や困りごとがないでした。私はプロジェクト中に 7 人の患者さんを経験しましたが、荘内病院退院時から奥山慎一郎先生や和泉典子先生より逐一応援やアドバイスなどを Net4U を通じていただき何とか遂行できたと感じています。私のような未熟で経験に乏しい医師ほどサポートチームは退院時カンファと同等に必須のものと感じていますしサポートがなければ在宅療養の継続は不可能という認識です。今後、連携の問題とも重なる部分も多く更なる分析、検討が必要です。

(8) 私からは「2 年目を迎えた在宅医療連携拠点事業室ほたるの活動報告」をさせていただきました。多職種連携のつなぎ役として今後ともよろしくお願い致します。

(9) 「介護老人保健施設の看取り対応」

みずばしょうの上野寿樹先生より。老健はもともと在宅復帰を目的の施設なのですが、特老が常時満床でありまた自患者家族のニーズもあるということで平成 21 年 4 月より老健でもターミナル加算が新設されました。そもそも検査や治療を行えない施設ですしその対象者の選定や対応は検討の余地が多いようです。今後「チームアプローチ」で事例検討を行いつつやすらかな看取りを推進してください。

(10) 「山容病院におけるアルコール依存症治療」

小林和人先生より。自殺多発地域である庄内においてアルコール依存症は受け皿がなく大きな問題です。山容病院では医師、臨床心理士、精神保健福祉士による認知行動療法（集団精神療法）を積極的に行っており今後はプレアルコホリック（依存症への移行のリスクが高い人達）への介入も視野にいられるそうです。今後とも庄内地域の拠点として活動に注目です。

(11) 「当院の胃 ESD の現状」

鶴岡協立病院消化器内科の菅原真樹先生よ

り。平成 23 年 4 月より平成 24 年 9 月まで胃腫瘍 63 症例 (64 病変) を経験、一括切除率は 95%、合併症は穿孔 0%、出血率 3% (2/64) で今後とも研鑽を重ねたいとのことでした。酒田では日本海総合病院がありますが、鶴岡地域での荘内病院を中心とした内視鏡による ESD 治療推進を含めて連携対応も必要でしょうか。

## (12) 「身近な疾患、ツツガムシ病」

鶴岡協立病院皮膚科の真家興隆先生より。私も経験がありますが「刺し口」は一度見たら忘れません。胸部やえき下に多くしっかりと全身のチェックをしないと見逃します。私の経験した方は危うく急性腎不全で命を落としかけました。最近秋にも発症の報告がありキノコ採り後には要注意でしょう。

第二部は、ちょうど鶴岡地区で今年 5 月よりちょうかいネットが稼働を開始したこともあり、庄内地域の「連携」を考えるシンポジウムを企画しました。

座長をお引き受けいただいた眞田淳先生、土田兼史先生、ありがとうございます。ディスカッションの時間が取れない不手際をお許してください。

基調講演に日本海総合病院の循環器内科部長の菅原重生先生をお招きし「地域医療連携の実践」と題して講演をお願い致しました。

先生は酒田のご出身で、今回の要請に対して快諾していただき感謝しています。以前に勤務されていた仙台厚生病院での心筋梗塞の病診連携の実際、去年 4 月より赴任された日本海総合病院での循環器疾患の実際と心臓リハビリ、それと現職の日本海病院での診療や連携パスなど紹介の 3 部構成でした。

連携は「人と人とのつながり」が大切であり、そのために多くの顔が見えて信頼関係を築く機会を作る事が大切であることを教えていただきました。単なる紹介状ではなく、どのタイミングで何をどのようにするのか記載をきちんとすることでスムーズな連携ができる。(まさに連携パスの真髄ですね) また絶えず検証する

ことでより強力な連携関係が作られていく。単なる研修会や講演会ではなく意見交換や弱音も吐ける環境も大切ですね。「情報」といっても誰がいつ何を必要とするのかは状況でまったく違います。

次にさとう内科クリニック佐藤顕先生から「ちょうかいネット 開業医は白フクロウの夢を見る」と題して、朝からの 1 日の流れを通しての診療所の風景をビジュアル化してとてもわかりやすく面白く講演をいただきました。ちょうかいネットの普及とウォシュレットの普及と重ね合わせ「もうあともどりできない」世界を強調されました。酒田では登録数はすでに 5,000 件を超えておりました。私も 160 例ほど登録し毎日病院を「回診」しております。顕先生の言われるように救急で紹介した患者さんの「その後」がほぼリアルタイムで見えるわけです。これが診療所の当たり前の風景になることを思い描いて日々登録しております。

次に「鶴岡における脳卒中連携パスの現状と課題」と題して荘内病院神経内科の丸谷宏先生より講演をいただきました。

最後に私が「ちょうかいネットとリンクした新 Net4U の展望」と題して今年の 5 月にリニューアルしちょうかいネットを装備した Net4U の紹介を致しました。特に在宅医療を中心とした医療と介護、福祉を繋ぐツールとして今後の活用の仕方に期待を持っています。

フロアからは、庄内プロジェクトで培われた顔の見える関係づくりを大切にしたい、決して IT 技術ではすべて解決できるものではなく如何に道具として使い勝手のよいもの、多くの方が利用できるものを構築していくか、などの意見や感想が述べられました。

午後 5 時過ぎに閉会となり、懇親会は月山荘で和やかに懇親となりました。庄内地域を一つの医療圏とした場合、酒田と鶴岡の医療連携の役割分担を意識することも大切です。この大きな課題のポイントとなる「人と人とのつながり」を形成する機会にこの集談会が力を発揮することを祈念して報告を終わります。

期 日：平成 24 年 12 月 7 日(金)・8 日(土)  
場 所：岡山コンベンションセンター

## 「第13回 日本クリニカルパス学会学術集会」 メインテーマ「実務と学問の融合～企画と運営を通じた学問への誘い～」

### 第13回 日本クリニカルパス学会に参加して

鶴岡地区医師会 総務課 遠藤 貴恵

12月7日(金)・8日(土)に岡山市にて開催された「第13回日本クリニカルパス学会学術集会」に参加しました。この会では「切れ目のない地域医療の処方箋～かかりつけ医機能の充実と地域連携パス」のセッションにおいて土田先生がシンポジストを務められました。そのほか、一般演題3題(口演2題、ポスター掲示1題)を提出し、医師会総務課の遠藤と市立荘内病院理学療法士の渡部さん、鶴岡協立リハビリテーション病院理学療法士の新田さんが発表しました。その中の2つの抄録をご紹介します。これらは、今後も「庄内南部地域連携パス推進協議会」の活動の一環として継続して行っていきたいと考えております。

また、私ごとではありますが、このたびのセッションにおいて「座長賞」をいただくことが出来ました。これも常日頃、パス推進協議会の活動を支えてくださっております皆様方のお陰であると感じております。この紙面をお借りして深く感謝申し上げます。

今後とも、医師・看護師・セラピスト・薬剤師ほか関係者で、より一層連携を図り地域住民のため貢献していきたいと思っておりますので、ご理解、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

### シンポジウム 4

#### 切れ目のない地域医療の処方箋 ～かかりつけ医機能の充実と地域連携パス～

### 電子化された脳卒中維持期パスの運用

鶴岡地区医師会 (土田内科医院)

土田 兼史

鶴岡地区では平成20年12月より電子化された脳卒中連携パスの運用を開始し、鶴岡市立荘内病院に入院した全ての脳卒中患者を登録した。3年間の運用で1,572名が登録され、パス運用と並行して疾患データベースが蓄積された。その分析により、約30%に脳卒中既往があり、約70%には高血圧症が併存していたことが判明し、維持期での脳卒中再発をいかにして防ぐかが課題となった。

このため目標を「再発予防」と「早期ADL低下防止」とし、情報共有のみならず血圧やBarthel Index(BI)の評価を重点項目とした疾病管理型維持期電子化パスを開発した。年1回(初回は半年後)脳卒中専門医による診察・画像評価も行い、維持期主治医と情報共有する循環型連携パスとして運用している。一定期間のパス登録患者をBIで階層化し、維持期開始から半年後および1年後におけるBIの増減を調べた結果では、開始後半年の間にBIが変動する例が多くみられ、特に中等度から高度障害群ではBI低下例が20%程度みられた。半年から1年の間では大きな変動は少なくなるものの、BI75以上の軽度障害群の20%程度にBI低下がみられた。血圧管理については、服薬状況はおおむね良好であったが、1年時で27%が



降圧管理目標より高い血圧を示していた。今後、早期 ADL 低下群や血圧コントロール不良群に対して、適切なりハビリテーションや多職種協働による生活面での介入などが重要となり、連携パスにこれらを組み入れていくことが必要と考えられた。

一方、維持期を担う医療機関については、参加率の低さ（42%）や、参加はしたもののデータ入力されていないケースが少なからず存在する（32%）ことなどが今後の課題と考えられる。シンポジウムではおもにその点に言及し、考察してみたい。

## 口演セッション「組織運営 2」

### 地域連携パス運用における協議会の役割と事務局機能

<sup>1</sup>社団法人鶴岡地区医師会 <sup>2</sup>株式会社ストローハット

○遠藤貴恵<sup>1</sup> 三原一郎<sup>1</sup> 土田兼史<sup>1</sup> 鈴木 哲<sup>2</sup>

#### 【はじめに】

地域連携パスは、院内パスとは異なり、有志によるボランティア的活動になりがちであり、その継続的な運用には困難も多い。山形県鶴岡地区では、医師会主導で地域連携パス推進協議会を設立し、複数の地域連携パスを組織的に運用している。

#### 【活動内容】

当地区の地域連携パスは、当初ボランティア的組織である研究会として始動したが、運用を続ける中、責任の所在や役割が不明確、病院など組織に属するスタッフが自由に活動できない、事務局機能が不十分、予算的裏付けがないなどの多くの課題に直面した。このような課題を解決するには、経済的基盤にたつた組織化が必要との認識のもと、2006年に庄内南部地域連携パス推進協議会を設立した。協議会会長は医師会長とし、その下に意思決定機関となる運営委員会を置いた。運営委員会は、会長、病院長、各個別パス委員長、事務局、ITサポート等から構成され、運営委員会の下に個別パス委員会を配置した。運営委員会は月 1 回開催され、事業計画や予算の承認のほか、パスの運用状況の確認、個別パス委員会の報告、講演会の企画などを議題とし、当地区の地域連携パスの核となる存在となっている。

#### 【考察】

地域連携パスを継続的に運用し、PDCA サイクルを回していくためには、それを支える組織が必要であり、当地区では医師会が主導し、地域連携パス推進協議会を設立した。6 年が経過した現在、協議会は順調に運営されているが、事務局機能に担うところが極めて大きい。

#### 【結論】

地域連携パスを継続的に運用していくためには、組織横断的な組織が必要であり、とくに事務局機能が重要である。



期 日：平成 24 年 11 月 17 日(土)  
場 所：鶴岡市中央公民館

## 平成 24 年度 緩和ケア市民公開講座

庄内プロジェクト  
市民啓発WG 佐藤 久美

平成 24 年 11 月 17 日(土) 第 6 回「緩和ケア市民公開講座」を、鶴岡市中央公民館市民ホールにて開催しました。

時々小雨が降るあいにくの天気でしたが、183 名の市民の方にご来場いただき、三川町長から来賓挨拶を頂戴しての開催となりました。

テーマ『このまちで ふつうに暮らす』

○講演「心の痛みをやわらげる」

～がん患者の経験から～

エッセイスト 岸本葉子さん

○報告「庄内プロジェクトの取り組み」

庄内病院 鈴木 聡先生

○寸劇「あなたが 家族が がんと診断されたら」 庄内プロジェクト 有志

今年、講師にエッセイストの岸本葉子さんをお迎えしました。岸本さんは旅や料理本などで著名な方ですが、今回はご自身が虫垂がんを体験していることから、がんの経験者としての講演をしていただきました。

「緩和ケア」とは終末期のみのケアではないこと、患者さんご自身が納得して医療を受けるために、医療者とより良い関係を築くことの必要性、またその方法など、ご自身の経験からお



岸本葉子さんと庄内プロジェクトスタッフ

話いただきました。

その他、鈴木聡先生の報告「庄内プロジェクトの取り組み」、庄内プロジェクト有志による庄内弁の「寸劇」では、実際緩和ケアに関わっている医師や看護師が現職の役で登場し、熱演で会場を笑いと涙で感動させました。来場者からは、「緩和ケアへの理解が深まった」「この地域での不安が安心に変わった」などの感想があり、また講師の岸本さんから「鶴岡のあたたかい雰囲気が伝わる講演会でした」とお言葉をいただきました。

この緩和ケア市民公開講座は、庄内プロジェクトに参加する医療機関、保険調剤薬局、行政その他の皆様のご協力により盛会に終わることが出来ました。スタッフとしてお手伝いいただきました皆様にも、厚く御礼申し上げます。



岸本先生の講演



寸劇の 1 シーン



期 日：平成 24 年 11 月 15 日 ( 木 ) 13：30～  
場 所：医師会 3 階 講堂

## 鶴岡准看護学院第 54 回生戴帽式

あいにくの雨模様の天気でしたが、ご来賓・保護者の方々の出席のもと厳粛に行われました。

### 学院長の式辞より

「戴帽式は責任の重さを自覚するために存在する儀式です。看護師になりたいと思った時の心を思い返し、一人でも多くの患者さんから心より感謝される人間性豊かな看護師となるべく学んで行っていただきたいと願っています。」

### 本間 梨沙

ナースキャップを被って、改めて自分は准看護師になるために一歩踏み出したように感じました。灯の儀でナイチンゲール像から灯をもらい、とてもきれいで感動しました。

ナイチンゲール誓詞を朗読しこれから先、この誓いを守って頑張りたいと感じました。

祝賀会は 2 年生が企画・運営してくださりとても素晴らしい会でした。来週から実習が始まりますが、今日の日を忘れずに頑張りたいと思います。

### 寒河江 尚土

とても緊張した戴帽式を無事終わることができました。患者さんにとって自分達は一筋の光でなければならないと強く感じましたし、自分

自身しっかりと輝ける一筋の光でありたいと思いました。今日の気持ちを忘れずに学校生活や実習に臨んでいきたいと思っています。

### 成田 衣里

これから始まる実習に不安な気持ちと緊張でいっぱいですが、半年間、クラスの皆と一緒に勉学に励み基礎的な知識・技術を身につけてきました。辛いことも乗り越えクラスの皆と頑張っていきたいと思っています。実習では笑顔を忘れず、患者さんに元気を与えられるよう努力し、精神的にも強くなれるよう力をつけていきたいです。

### 菅原 麻優

ナースキャップを戴き灯の儀・ナイチンゲール誓詞を朗読し、気持ちが引き締まる思いでした。これからの実習や学校生活に不安な気持ちもありますが、今日の感動や様々な思いを忘れずに、頑張ろうという気持ちの方が大きいです。人との出会いを大切に、1 年半後には目標である准看護師の資格を取得できるよう、決意することができました。式には親や所属医院の先生も出席していただき、また、心強い先輩方より祝福していただいて本当に感謝しています。



故 福嶋 茂樹 先生のご冥福をお祈り申し上げます。

平成 24 年 10 月 25 日ご逝去 満 67 歳

## 新入会員の紹介



氏 名：遠<sup>えん</sup>藤<sup>どう</sup>睦<sup>むつ</sup>美<sup>み</sup>

生年月日：昭和 31 年 6 月 27 日

生まれた所・育った所：上山市・鶴岡市

勤務先・診療科名：遠藤医院・麻酔科 他

出身校：杏林大学

趣味・特技：ドライブ・ラーメン食べ歩き

鶴岡地区医師会会員の皆さんへ一言：この度父より遠藤医院を継承いたしました。未熟者ですが、どうぞ宜しくお願い申し上げます。



## 表 紙

## 「 飛 瀑 (滝) 」

事務局長 佐藤 耕一

11月3日から1泊2日の日程で、事務局「総務課」「ほたる(室)」「みらい健康調査(室)」の一行12名が箱根旅行に出かけた。宿泊地は湯本温泉であり、ホテルの窓から眺めた飛瀑(滝)をしばらく見つめていたら幻想的なものを感じたので、それを表現するため1/2秒でシャッターを切った。

## 編 集 後 記

今年は、厳しい残暑が長く続き、やっと涼しくなったと思ったのもつかの間、一転して雨の多い寒い日の連続で、秋らしい風情を楽しむこともなく冬になってしまいました。昨年よりも、うんと早い初雪で、ここ数日はすっかり真冬のような景色になっています。

12月は師走と言いつわりますが、まさしく、国会議員の先生方は、この寒空の下を駆け回っているのではないのでしょうか。年の瀬の慌しい中の選挙となりました。沢山の政党が乱立し、ちっとも名前が覚えられません。ましてや、候補者も、くるくると所属が変わるため、いったいどこの政党から立候補しているのかわからなくなります。

この選挙で、政局は大きく変わるのでしょうか。無駄な補助金をばら撒く政策から、本当に国民のためになる政策に変換するのでしょうか。私たちにも、きちんとした判断をすることが求められています。

今年も様々な出来事がありました。そろそろ、十大ニュースの発表もある時期です。皆様の中での十大、いや、重大ニュースは何だったのでしょうか。今月号の医師集談会の記事にもありますが、新Net4Uが稼動し、 चौかいネットを利用できるようになったことは、連携を通じてより良い医療を提供することを目指す鶴岡地区医師会としては、新たな一歩を踏み出す出来事として、やはり大きなニュースだったと思います。これからの庄内地区の医療は、北も南も一致団結して、限られた医療資源を有効活用しながら、一緒に荒波をかいくぐっていかなければなりません。そのための準備は出来上がっていると信じています。

来年も皆様にとって、明るい良い年になりますよう、お祈り申し上げます。

(福原 晶子)

編集委員：伊藤 茂彦・福原 晶子・石原 良・中村 秀幸・斎藤 高志・今立 明宏

発行所：社団法人鶴岡地区医師会 山形県鶴岡市馬場町1-34

TEL 0235-22-0136 FAX 0235-25-0772 E-mail ishikai@tsuruoka-med.jp

URL <http://www.tsuruoka-med.jp>